

一 般 講 演

1. SPAC T₄ RIA キットの基礎的検討

○佐々木由三 高原 淑子
与那原良夫
(国立東二)

抗 T₄ 抗体をプラスチック試験管に固定化した方法が開発され、SPAC T₄ RIA キットとして使用されている。本法は抗体固定試験管を用いるため B/F 分離剤や遠心分離は不要で、簡単に B/F 分離ができる利点がある。われわれは本法について日常の臨床検査に必要な二、三の検討を行なったので報告する。

操作は全て使用書の順序で行なったが、われわれはデカント後に蒸留水による洗滌操作を加えている。

再現性は同一キット、同一血清で 10 回測定を行なったが、得られた CV は甲状腺機能低下症 6.45%、正常 2.90%、甲状腺機能亢進症 2.34% であった。

回収率は機能亢進症、正常、機能低下症の 3 種の血清にそれぞれ 2, 5, 10, 20 μg/dl の T₄ 標準血清を添加して行なった。添加量による平均回収率はそれぞれ 107, 106, 107, 103% で、また機能亢進症 103.9%、正常 104.8%、機能低下症 108.5% であった。

従来法の RIAMAT T₄ との相関では、相関係数 0.992, $Y=0.973x+0.185$ で、きわめて良好な相関を示した。

SPAC T₄ 値 (μg/dl) : 正常者 80 例で 5~12, 3 (平均 8.08±1.97), 甲状腺機能亢進症 13~34.7 (平均 20.6±5.87), 甲状腺機能低下症 1.6~4.8 (平均 3.03±0.88)。

2. セクレチン RIA キットの基礎的検討

○高原 淑子 与那原良夫
佐々木由三
(国立東二)

われわれは [Tyrosin¹] セクレチンを用いたキット (第一 RI 研) を使用する機会を得たので二、三の基礎的検討を行なった。

対象は正常者 68 例、胃癌および胃潰瘍 9 例、十二指腸潰瘍 3 例、肝炎・肝硬変 18 例、胆石症 14 例、膵炎 3 例、糖尿病 6 例、腸閉塞 2 例、悪性腫瘍 (非消化器系) 25 例、甲状腺機能亢進症 13 例および甲状腺機能低下症 11 例の総計 181 例である。

成績 : 4°C のインキュベーションにおける標準曲線は 50~100 pg/ml の間は緩徐で、それ以上の濃度では 1,600 pg/ml に至るまで比較的急峻に下降する良好な曲線を示し、20°C 恒温槽の場合でも B/Bo% は低値を示したものの 4°C のそれとほぼ平行していた。濃度既知試料 34, 52, 73 pg/ml の血清にそれぞれ 50, 100, 200, 400 pg/ml を添加した際の平均回収率はほぼ満足すべきものであった。血清 3 試料を用いて同一キット内で同一血清を試験管 5 本で測定した際の CV は 2.13%, 1.08%, 3.30% と良好な成績を示した。

正常者空腹時セクレチン値は 67~239 (平均 130.6±38.0) pg/ml であった。胃癌・胃潰瘍・十二指腸潰瘍では正常者より平均値で高値を示し、肝炎・肝硬変症および胆石症ではほぼ正常者に近く、これに反して膵炎および糖尿病例ではいずれも低値を示した。

なおブドウ糖負荷試験時のセクレチン値をガストリン、C-ペプチド値などと併せて検討し、興味ある所見を得た。